

保育者養成校における音楽指導法の研究

中 村 浩 美

The Study of Music Teaching Method at Training School for Child-Care Works.

Hiromi NAKAMURA

キーワード：ピアノレッスン・弾き歌い・指導法

はじめに

音楽教育指導全般に渡る授業の内容や指導法の反省点及び課題点を深く考えることがこの2・3年特に多くなった。学生の音楽教育に対する学習方法や能力と進度、学生の授業態度、実技試験における基本的なマナーと成果や課題点、学生の保育者になるための意識から起こる音楽教育での成長、学生のピアノ練習室の使用の在り方、これらを主に保育者養成校である本学幼稚教育学科1年生の授業である「子どもの歌と伴奏法」に絞って、音楽教育指導と学生の現状を報告したい。

本学はピアノ実技試験が行われないため、入学前に個人の能力を知ることができず、その能力を知らないことで入学してからのレッスン指導に影響をもたらすこともある。

1年生においては入学試験の面接でピアノ経験があるか否か尋ねることもあるが、入学後の最初の授業で初心者か経験者か、また、経験者でもブランクがあるのかなどの学生個人の進度を初めて知ることとなる。

本学では1年生も2年生も3班に分かれての授業が構成され、各班ともに1週間に1回90分の授業となっている。授業には常勤教員2名と非常勤教員9名の計11名の音楽スタッフで学生の指導に当たっている。

1年生の「子どもの歌と伴奏法」では「コード奏法」と「ピアノレッスン」の2グループに分けて前半と後半の入れ替えを行い、必ず両方の演奏

技能のための授業を受講することとなっている。前半と後半のグループ入れ替えのための教室移動を含めると約40分ずつの授業となってしまう。また、2年生の「保育と音楽表現」でも「手遊び歌と弾き歌い」、「ピアノレッスン」の2グループに分けての授業を前半と後半に分かれて行い、必ず両方の演奏技能のための授業を受講することとなっている。やはり1年生同様、前半と後半の教室移動を含めると約40分ずつの授業となってしまう。1年生の「コード奏法」と2年生の「手遊び歌と弾き歌い」は前半と後半にそれぞれ20人弱での集団による演奏技能の授業となるが、「ピアノレッスン」は1名の教員に前半と後半それぞれ平均して4人から5人（6人の場合もある）と変動的であり、学生一人ひとりの個人への演奏技能の指導となるため、学生1人当たり10分から20分と時間的にも変動のある授業となってしまう。ピアノ初心者や基本的な音楽理論を理解していない学生、また、能力の低い学生が一つのグループに固まってしまうと時間的な余裕が全くなく、時に授業外でのレッスン指導が必要となってくる。1年生は特に授業のカリキュラムが詰まっており時間的な余裕をみつけるのが難しいが、なんとかその状況の中に時間を都合して、常勤教員は勿論のこと非常勤教員も熱心なレッスン指導を行い、学生のために保育の現場で求められる演奏技能を修得できるための支援に繋げている。

年々ピアノ初心者やピアノ実技における能力が

低下していることが本学の問題点または課題点であることから、平成24年度より「ピアノ個人レッスンサポート講座」を入学前に3回行い、新年度入学生には希望で受講してもらうようになった。この講座には受講希望者が多く、新年度入学生自身も音楽の基本的な理論を理解していない、ピアノを弾けるようになれるのか、ピアノレッスン授業についていけるのか、最終的に保育者になるために必要なピアノ技能を身につけられるのかなどの不安が大きく受講するに至っている。白石教授との共同研究による本学紀要第38号「保育者養成校における音楽指導法の研究—第8報—」にも記載している。3年目を迎えるこの講座を受講した新年度入学生によるアンケートや声を聞いてみると以下のような感想が殆どであった。

- ・大変勉強になった
- ・勉強になった
- ・不安感が十分軽減した
- ・不安感はある程度軽減した。
- ・入学して頑張る気持ちになった。
- ・苦手意識を克服したい。
- ・ピアノが上手になりたい気持ちが高くなった。

このように受講生全員が勉強になった、ためになったと言う回答や声であった。しかしながら極々少数に、少し不安感が増加した、さらに不安感が増加したと言う感想もあり、原因が何かを考えて改善していきたい。

以上のような現況を見つめ直しながら、この10年での保育者を目指して入学してきた1年生の「ピアノレッスン」と「弾き歌い」の指導法や学生の反応、成果、課題点などを平成26年度の本学紀要に記すこととした。

1. 「子どもの歌と伴奏法」の構成内容

この授業は1年生全員を3班に分けて各班ともピアノレッスンとコード奏法の2つの授業を前半と後半に分けて両方を必ず受講する卒業必修である。

コード奏法は前半と後半に約20人弱ずつのグループ指導で、一人ずつキーボードを使用できるようになっている。

ピアノレッスンにおいて常勤教員は研究室で、非常勤教員はレッスン室にて1人ずつの個人レッスンとなり、前半と後半の人数によって少し差はあるが、1人当たり約10分から15分内のピアノ実技と弾き歌いの指導を行っている。

本学ではピアノ実技の試験がないため、新入生のピアノ実技における実力を把握できない状況で各先生方への割り振りを行っている。この件においては先生方が担当する学生の実力や進度に偏りが出てくるのが問題点である。

最初の授業ではオリエンテーションを行ってから各ピアノ指導教員によって、コード奏法授業とピアノ個人レッスンの前半と後半に分ける作業をして授業を始めている。

オリエンテーションの内容は以下の通りである。

- ・教員の紹介
- ・各学生の担当教員の発表
- ・コード奏法とピアノレッスンの前半と後半の時間
- ・レッスン記録の記載についての注意事項
- ・レッスンを受けるに当たってのマナー
- ・コード奏法授業の教室
- ・コード奏法のテキスト代金と集金日
- ・ピアノ練習室の使い方と注意事項
- ・欠席回数によるチューター指導

これらのことを行った上で、わからないことは何でも尋ねるようにとの指導をしている。

1年生となった新入生は最初の授業とあってか、皆緊張ぎみでしっかりした声での挨拶もままならぬ状態である。シラバスには現在取り組んでいるエチュードの教則本を持参するようにと記載しているが、忘れる学生や入学前に行っている「ピアノ個人レッスンサポート講座」で使用したテキストのみを持って来る学生もいる。

2. ピアノの演奏技能指導の内容と学生の進度状況と反応及び意識

最初のレッスンでは各学生がどの程度の実力を持っているかと進度状況を知るために、まずはピアノ演奏を聴くことにしていている。ところが、残念なことに最初の授業にもかかわらず春休み中に練

習を怠っている学生や練習方法を理解していない学生、そして初心者が多いことが現状である。そこで1年生になったばかりの学生に、何のために本学の幼稚教育学科への進学を希望したのかを問うこととしている。つまり保育者になることを強く思っているのかどうかである。学生は緊張しながらも保育者になりたいと答えるのだが、ピアノ演奏技能が必要不可欠であることにまだ気付いていないようである。そして卒業必修科目であることの意識も低い。入学したばかりで仕方ないことではあるが、単に子どもが可愛いと言うだけで、子どもにとって音楽がいかに大切か、音楽が大好きで先生と一緒に歌えることの喜びが想像できないようである。ただ保育者になりたいだけではなく、どんな保育者になりたいか、そのためにはどんな努力が必要かを考えるように促している。

基本的なことから指導するのは時間を要するが、1年間の習得レベルや成長を考慮した上での指導に必要な項目と実際にレッスンで指導していることを下記のようにまとめてみた。

I、ピアノを弾くための準備と指導

① 自分に合った椅子の高さと椅子の上げ下げの仕方

*両足がきちんと床に着くことでピアノを弾くための態勢が整えるが、学生によっては椅子が高すぎて足がしっかりと着かず浮いている場合があったり、逆に低すぎてピアノを弾くための態勢が取れにくくもある。

*椅子の上げ下げは座る部分の後ろに、ストッパーと上下に動かす金具のような物があるが殆どの1年生が知らない。

② ピアノから体までの幅

*鍵盤部分からお腹まで、バレーボール1つ分を空かせて座るとピアノが弾きやすい。しかし体がピアノに近すぎて弾きにくい態勢の学生がいる。

③ 椅子の座り方

*背もたれに寄りかからないよう、少し背もたれと背中の間を空かす。このことはピアノを弾くための良い姿勢にも繋がる。学生によつ

てはしっかりと背もたれに背中を着けている場合がある。

④ 姿勢

*猫背に近い姿勢になると弾き歌いで声が出にくい状態になり、ピアノの演奏でも体重のかけ方に影響がある。(ピアニストは体重のかけ方を熟知しているため例外である)

⑤ 足の置き方

*床に足の裏をしっかりと着けて体重を支えることは体で奏でることに繋がる。学生は椅子の足につま立つような形で足を置いていることが多い。

⑥ 鍵盤に手を置く高さ

*鍵盤と平行の高さが理想である。下がりぎみや上がりぎみは指や手に負担がかかり体重を支えらず余計な力が入る。下がりぎみの学生にはひじと手首の中心部分を支えてあげることで改善されることがある。

⑦ 手と指の形

*昔ほど丸い形を強制することはなくなったが、第一関節を少し曲げて丸みを帯びた形でなおかつ指のお腹で弾くことによって、指の引越しや細かい動きがしやすくなる。指の形はなかなか学生には難しく、年々指導が甘くなっている。しかし、指を伸ばした形で弾くと平べったい汚い音になるのでその点においては注意指導をしている。

II、ピアノ（伴奏法も含めて）の練習方法に必要な事項と指導

① 楽譜は一番左から大切なことが記されているため、最初から音符を見て弾かないこと。つまり、ト音記号かヘ音記号か、何調でどこにシャープもしくはフラットが幾つ書かれているのか、何拍子か、のことである。

*大切なことを見逃して最初から音符のみを見て弾く学生が多いため頻繁に注意指導をしている。

② 正しい読譜ができるようになること。

*音符が読めないことには鍵盤を弾くことができず、先の音符まで読めてないと指が動かず

- 音楽が止まってしまうためである。学生の殆どがこの読譜が苦手で特にヘ音記号がすらすらと読めないことが目立つ。
- ③ リズムを理解して正しくたたけるようになること。その際に何拍子かを確認しておくこと。
 *簡単なりズムの名称や拍数の理解ができていないことが多い。算数が苦手な学生によく見られるため、図式に書いて指導することも度々である。
- ④ 両手を使っての曲は必ず片手ずつゆっくり練習してから両手の練習に入ること。
 *片手ずつの練習が両手での演奏に大変役立つことを面倒に思う学生がいるため、両手で弾けない理由を説明しながら片手ずつの練習を取り組ませている。
- ⑤ 最初から焦って速く弾くのではなくゆっくり丁寧に確認しながら弾くこと。
 *学生はゆっくり練習しているつもりのようだが、ゆっくり弾くことでリズムがわからなくなる場合が多い。拍子をゆっくり数えてあげながらのレッスンをすることで解決する。
- ⑥ 苦手なところやつまずくところは最初に戻って再度弾く練習は意味がなく、何度もゆっくり部分練習をすること。両手でうまく弾けない場合は片手ずつの練習に戻ってから両手で弾いてみること。
 *つまずいたり止まるところなど苦手な箇所のみの部分練習をする学生は少なく、間違えた場合はまた最初から弾くことがとても多い。この点においては厳しく指導して苦手な箇所の改善策であることを学生に理解してもらっている。
- ⑦ 得意なところは速く、苦手なところはゆっくりにならず一定のテンポで弾けるようになること。
 *どうしても苦手な箇所がゆっくりになる場合は部分練習を何度もすることや、速さを一定にするためにまず苦手な箇所を弾く速さで全部を通して弾くよう、テンポを定めてメトロノームを使用したり手拍子や口拍子で弾けるように指導している。
- ⑧ フレーズの終わりや休符になるところ、そして曲が終わるところは軽く手首を使って力を抜くこと。手首を軽く使って力を抜くことによって音色が良くなり雑な汚い音にならない。また、力を抜かないことによって手首からひじにかけて硬くなって痛くなる場合が殆どである。
 *この手首を使って力を抜くことはとても難しく簡単に身につく技術ではない。しかし、腕から指までの脱力方法を何度も指導していくことで感覚をつかむ学生もいる。また、学生は手首を使って力を抜く奏法がきれいな音色になることも聞き比べて理解している。焦らず指導を続けていきたい。
- ⑨ 途中つまずいたり止まったりした時は楽譜をよく見て確認すること。
 *ピアノが苦手な学生はつまずいたり止まると、鍵盤のみを見て音を探していることが多く、答えが書いてある楽譜に目を向けることができず読譜力のレベルが低いことが言える。読譜強化の指導が必要である。
- ⑩ 指を1本ずつ独立すること。
 *未経験者、経験者に問うわけではないが、特に未経験者は指を1本ずつ上げ下げする独立の形を取るのが難しく、弾いていた音から次の音に移行する時に音がダブってしまう傾向にある。そのため弾いていた指から次の音の指に移行する際に瞬時に指を上げ下げすることをゆっくり丁寧に指導している。この練習指導は片手ずつ行うことがベストであり、少しずつではあるが1年生が終わる時期には成長が見られる。

以上のことを踏まえて学生が練習方法を身につけ、そのための指導を根気よく続けることで曲が完成される達成感や喜びを学生に感じてもらいたいと思っている。

3. ‘弾き歌い’における歌唱指導

‘弾き歌い’は名の如しピアノを弾きながら歌うことであり、殆どの学生が未経験で至難の技でもある。伴奏法は先に報告した練習方法を行う必

要性が十二分にあり、歌唱法は本学紀要第30号平成17年度「保育者養成校における音楽指導法の研究—第1報—の歌唱指導に載せているためご参照頂きたい。

人前で一人で歌うことはかなりの緊張感があり、声にコンプレックスをもっている学生や、メンタル面が弱く何らかの問題を抱えている場合は特に難しく、声量にも出しにくい音域や表情にも影響を来たすことになる。

歌うことが楽しくても思うように声が出ない、表情がこわばる、伴奏がうまく弾けず歌にまで神経や意識が届かない。と言う学生は本学にもたくさんいるが、歌はピアノのように幼児期より継続してレッスンを受けていなくても、正しい発声法で声を出すことへの羞恥心を取り除くことだけでも十分に成長できる。

初めての‘弾き歌い’のレッスンでは、出された課題の曲をまず歌って聴かせることから始め、次に一緒に歌うこと、そして何が良く何が問題点であるかを認識することで歌に対する意識改革を行なうようにしている。

- 「子どもの歌」における歌唱指導に当たって学生に頻繁に指導していることは以下のとおり。
- ・口角を上げる（笑顔作りと明るい音程の意識）
 - ・表情筋を上げる（笑顔作りと明るい音程の意識）
 - ・口を大きく開ける（上顎を上げる意識）
 - ・口をはっきりと動かす（滑舌の意識）
 - ・笑顔を絶やさない（子どもの歌の意識）
 - ・歌詞の意味を調べる
 - ・歌詞をイメージを持ちながら読む（場面、情景、登場する人や動物の意識）
 - ・歌の情景を思い浮かべ絵を描く（イメージの意識、歌詞への想い）
 - ・周りに子ども達がいることを想像する（保育者の意識）
 - ・ピアノでメロディーを弾きながら歌う（正しい音程とリズムの意識）
 - ・体を使う（腹筋、背筋、腰筋の意識）
 - ・鏡を見て練習（表情の意識）

以上のように意識改革を重視することを第一に実技指導を行なっている。

生活の一部となっている歌が大好きな子ども達と共に歌う喜びや、音楽によって育まれる子ども達の豊かな感性を磨ける一助として歌を楽しんでもらいたい。

学生は1年間で約15曲の‘弾き歌い’を試験を兼ねて学んでいるが、出にくかった声、硬かった表情などが少しずつ改善されて、何より学生自身が歌うことへの喜びを感じるようになっていることは嬉しい。‘エチュード’は楽しくないけど、‘弾き歌い’は楽しくやりがいがあるとの感想も多い。

今後は地声と裏声であるファルセットとのエンジで悩んでいる学生を一人でも多く個人指導して伸ばしていきたいと考えている。

おわりに

保育者を目指して入学してきた学生が休学や退学をせず、意欲的かつ積極的に学ぶ姿勢を持つよう、個人の性格を早く把握して一人ひとりに見合ったレッスンをしていきたい。

個人の性格を早く把握すると言う意味は、ある学生は厳しく指導された方が怠けずに頑張れる、また、ある学生は厳しくされると緊張感が増して手も声も震え練習成果を出せないままのレッスンになる。と言う具合にそれぞれの性格の違いを見極めることもレッスンの成果に繋がるとも考えられる。

学生の成長が少しでも見られた場合には、心の底から褒めて次のステップへの起動力のきっかけになればと思っている。

子ども達にとって音楽はとても楽しい生活の一部であり、ウキウキ、ワクワク、ドキドキする毎日であろう。その子ども達のお手本となる保育者が子ども同様ウキウキ、ワクワク、ドキドキの喜びを持つことは大変価値のあることである。

本学幼児教育学科の学生にもその価値ある意識を持って免許取得に頑張れるよう、教員の反省点を改善し、信頼ある中での指導を続けていきたいと考えている。

参考文献：

- 1) 白石景一、中村浩美（平成17年度）「保育者養成校における音楽指導法の研究—第1報—」『長崎女子短期大学紀要第30号』
- 2) 白石景一、中村浩美（平成18年度）「保育者養成校における音楽指導法の研究—第2報—」『長崎女子短期大学紀要第31号』
- 3) 白石景一、中村浩美（平成19年度）「保育者養成校における音楽指導法の研究—第3報—」『長崎女子短期大学紀要第32号』
- 4) 白石景一、中村浩美（平成20年度）「保育者養成校における音楽指導法の研究—第4報—」『長崎女子短期大学紀要第33号』
- 5) 白石景一、中村浩美（平成21年度）「保育者養成校における音楽指導法の研究—第5報—」『長崎女子短期大学紀要第34号』
- 6) 白石景一、中村浩美（平成22年度）「保育者養成校における音楽指導法の研究—第6報—」『長崎女子短期大学紀要第36号』
- 7) 中村浩美、白石景一（平成23年度）「保育者養成校における音楽指導法の研究—第7報—」『長崎女子短期大学紀要第37号』